# 観心寺如意輪観音坐像追考

## ——観音の女性性という視点から——

井上一稔

## はじめに

観心寺如意輪観音坐像の女性的な表現については、誰もが認めながらも、これまでその目的について踏み込んだ議論がなされてこなかったといってもよい。私はこの女性性の理解こそが観心寺像が作られた理由を知る肝要な手掛かりと考え、かつて拙稿を発表した(1)。そこでは紙面の都合により省いた部分や論じ足りない点も見受けられた。また近年、これ以後に考えたこともあり(2)、前稿の不備を補うためにも、改めて観心寺像について考えてみたい。

## 一　観心寺如意輪観音坐像の女性性

その女性的なイメージを作り出すのは、柔らかでふくよかな顔立ちと上品で慎ましやかとも思える表情、半眼に見開いた目、ぽってりとした唇、顎下のふっくらとした肉付き、そして豊艶な体つきを感じさせる肩のまるみ、わずか

に頭を右に傾け右手第一手の肘を深く折って掌を頬にあてる仕草、宝冠の下に表される豊な髪といったところにある。

神護寺・高雄曼荼羅中の如意輪観音は、基本的な図像的特徴の他にふくよかさを示すことにおいて観心寺如意輪観音坐像（以下、観心寺像）と共通するものの、右手第一手が肘を外に張り、掌をみせるように開いて頬に当てる点で異なり、これを比較すれば観心寺像には女性的な慎ましさが表現されていることがよく理解できる。さらに東寺・伝真言院曼荼羅の如意輪観音を加えて比較しても、観心寺像は上半身の傾きを抑え、宝珠手や左輪宝手などの腕部を出来るだけ前の腕に隠して六臂の動きや存在の強調を避け、その怪異性を抑える工夫をなし、まとまりのよい造形を見せている。これらのことは自然な人体把握につながり、女性性に寄与している。

また最も作風と制作時期が近く、作者さえ共通すると考えられる神護寺五大虚空蔵菩薩坐像（以下、神護寺像）は、その表情が観心寺像よりやや強く意志的であり、頬から顎にかけてのしまりが強く、両臂を大きく外に張り、そこに鋭角的なイメージを与えて結跏趺坐する体勢は女性性から離れる。観心寺像は、神護寺像より頬の張りが豊かであることに加えて、肌に肉色を用いること、念珠手と光明山手が円やかに大きく外に伸びて包み込むようなイメージを与えるのも女性的な表現である。また片膝を立てて坐すのは女性性を演出する要素であることは、例えば薬師寺八幡三神像の神功皇后・仲津姫像を想起すればよかろう(3)。

ここで観心寺像の女性性が何故生みだされたかを理解するために、まず現図胎蔵曼荼羅において如意輪観音が位置する蓮華部院についてみておこう。注目したいのは、第一列の観自在菩薩の上下に、女性の上着である襤褸衣（羯磨衣）を着する毘俱胝菩薩と多羅菩薩が配されていることである。この二尊は、現図曼荼羅に先行する胎蔵図像や胎蔵旧図像では、襤褸衣は着しておらず、現図になってからの変化であることが知られている(4)。つまり現図以降に、改

めて観音の中に女性的なものを見出そうとする意識が出てきたといえる。因みに、多羅尊は『大日経』具縁品、『大日経疏』に、中年の女人の状になすと記される女性尊である(5)。このことは、空海も『五部陀羅尼問答偈讃宗秘論』で触れ(6)、『諸説不同記』にも二尊の女性尊としての特徴は認識されている(7)。

このように捉えてみると、インド・エローラ第四窟の毘倶胝菩薩と多羅菩薩を脇侍とする観音三尊や、敦煌出土の蓮華部八尊曼荼羅（八世紀）の中心の観音三尊に関する田中公明氏の言及は興味深い(8)。田中氏は、これらを現図胎蔵曼荼羅の蓮華部院の形成過程とみなしておられるのであるが、この両脇侍はまさに乳房を表して身体的に女性尊としており、現図胎蔵曼荼羅においての女性装に連続することが明瞭なのである。

以上のように、現図曼荼羅成立時に、改めて観音の女性的な面に関心が持たれたことが判明し、その蓮華部院にはじめて登場する如意輪観音にも女性尊という属性が存在しても不思議ではないことが理解できるのである。

## 二　橘嘉智子の夢と玉女と如意輪観音

前稿(9)では嘉智子の御願であるこの如意輪観音坐像を理解するために、嘉智子崩伝（『日本文徳天皇実録』嘉祥三年五月五日条）に記される、弘仁六年七月七日に仏の瓔珞を著すという夢を見てから六日後に皇后となったという記事を考察し、ここには仏教的な理想の皇后である玉女の誕生を告げる意図のあることを指摘した。玉女とは、転輪聖王の七宝の一つであり、王の側にあって王の衣に触れただけでその健康状態が分かり、また王の心が何を望んでいるかを察知することができる（『涅槃経』十二）という存在である。

本稿では、この解釈を別の面から論じてゆくが、まず、空海請来の『蘇婆呼童子請問経』巻中に(10)、この夢に通じ

るような、金瓔珞を得る夢が説かれていることに注意しておきたい。この夢は、諸願成就の好相の一つとして挙げられている。改めて、嘉智子の夢は仏教的解釈を可能とする根底があることが判明し、立后に仏教的色合いを付加させていることが知られるのである。

次に、嘉智子及びその周囲が玉女を意識する環境にあったことを、中国及びわが国での、玉女の主である転輪聖王の受容をみることから理解しておこう。

古く中国北朝時代に、造像銘に皇帝を「金輪を転ずる輪王」とみなす願文のあることが、倉本尚徳氏によって指摘された(11)。唐代では、不空が皇帝を「菩薩が衆生済度のために国王となった転輪聖王」と位置付け、この立場は不空の弟子たちにも共通し、空海の師である恵果にも表れていると、苫米地誠一氏は述べられている(12)。そして苫米地氏は、空海も『性霊集』の中に天皇を転輪（金輪）聖王と表現する文章がいくつも見られ、淳和朝に出された『秘密曼荼羅十住心論』巻二においては、国家観の中での理想の国主として、仏教的な転輪聖王が説かれていることを指摘された(13)。

このように、中国北朝からわが国の平安初期にいたる時期には、皇帝・天皇を転輪聖王とみなす思想が存在したことが明らかになる。そしてこの事実を皇后に及ぼして考えれば、皇后は転輪聖王の妻ともいうべき玉女と結びつけられていたと考えることに無理はなかろう。なお、空海の『秘密曼荼羅十住心論』巻二における、転輪聖王の説明の中で女宝（玉女）を含む七宝も説明されている(14)。

さらに嘉智子と玉女の繋がりを暗示する説話として、『日本霊異記』下巻三十九話を取りあげておこう。この話は、伊予国神野郡の石鎚山で浄行を積む寂仙菩薩とよばれる禅師があり、後に嵯峨天皇に転生するという内容である。朝枝善照氏は、奈良時代に伝わっていた『歴代三宝紀』に隋文帝が菩薩の応現にして転輪聖王と見なされていることを

指摘し、この考えが上記説話で浄行の菩薩の生まれ変わりとしての聖君嵯峨天皇に表れているとされた[15]。上記した空海の転輪聖王観からしても、嵯峨天皇を転輪聖王とみなす意識を受け取ることができる。そしてこの説話に関連して、先に夢を検討した橘嘉智子崩伝に、「故老相伝」としてほぼ同様な話をのせ、嵯峨天皇に生まれ変わる上仙（『霊異記』の寂仙菩薩）とともに、上仙を檀越となって供養する橘嫗が登場し、橘嫗は転生して皇后である橘嘉智子となったという話が加えられている[16]。この文脈においても、天皇を助ける皇后としての玉女の存在が浮かび上がるのである。

さて以上のように、嘉智子およびその周辺に玉女が意識されていたことは確かなことと考えられるが、それでは玉女と如意輪観音はいかなる関係にあるのだろうか。前稿では、『観音経』の三十三身に変化して法を説く中であらゆる婦女身となること、如意輪観音の経典の一つ解脱師子訳『都表如意摩尼転輪聖王次第念誦秘密最要略法』に、真言の三昧によって輪王の七宝のような功徳が得られると説くことから[17]、如意輪観音と玉女が繋がることを述べた。

本稿でも改めて如意輪観音と玉女の関係をみておきたい。如意輪観音の特徴として、先に女性尊という性格を内包することを述べたが、ここでは如意輪観音のもう一面をみておこう。岩本裕氏は、如意輪観音の梵語名「チャクラヴァルティ=チンターマニ」（cakravarti-cintāmaṇi）は「どこへでも自由に転がっていって、衆生の願いを何事でも聴きとどけてくれる者」という意味であり、この中に含まれる cakravarti(n) は一般に「転輪聖王」と訳されることに注意され、先の『都表如意摩尼転輪聖王次第念誦秘密最要略法』という経題名の中に「如意摩尼転輪聖王」とあることも指摘される[18]。また朴亨國氏は、如意輪観音の二大性格が如意宝珠と転輪であったとし、如意輪観音経典にみられる「無障礙観世音」「無能障礙観世音」という名称は、転輪聖王が持っていた輪が転がって自在に敵を破砕するよう

に、観音の説法も衆生の迷いやあらゆる障害を破すという功徳をイメージした名称と思われるとされている[19]。このように如意輪観音は転輪聖王とも深い関係を持っていたことが知られるのである。

次に如意輪観音と玉女が結びつく最も明瞭な史料でありながら、前稿では嘉智子の時代以降に成立した『覚禅鈔』に記された史料であり、その出典が不明瞭なことから十分に検討しなかった如意輪観音の記事[20]を取り上げたい。

本尊の王の玉女に変ずる事

又云はく、邪見心発り、淫欲熾盛にして世に堕落すべきに、如意輪われ王の玉女と成り、其人の親しき妻妾と為りて共に愛を生じ、一期生の間、荘厳するに福富を以ってし、無辺の善事を造らせしめ、西方極楽浄土に仏道を成さしむ。

まさしく如意輪観音が王（転輪聖王）の玉女と変身して邪心を治め、一生の間妻妾となって富貴を約束し、西方浄土に導くとされているのである。弥永信美氏は、初めの「又云」は、引用文の前の記事にある「別本軌云」であるとし、『覚禅鈔』が示す経典中の

観自在菩薩如意輪瑜伽秘密念誦儀軌一巻無訳者

聖如意輪観自在菩薩修行儀軌一巻無訳者

已上二本内、文大略同、初書若智證録書歟可尋

という二本のいづれかであろうとされた。そしてこれらを、興然（1121～1203）・覚禅（1143～1213頃）の時代からあまり遠くない時期に日本で偽作されたものと判断された[21]。別本軌の比定については、弥永氏の考えに賛同するものであるが、わが国での偽作と断定するのには躊躇させられる。

中国においても変化観音の中では比較的新しく登場した如意輪観音は、長部和雄氏の述べられるように、不空時代以降に密教が庶民化される中で[22]、様々な信仰の展開を見せていたと考えられる。如意輪観音の関係経典には大正蔵に収録される以外に、『金輪呪王経』[23]など実態の不明なものあり、敦煌などには『別行』なるものが残り、それを円仁が請来している可能性がある[24]。また上記儀軌について覚禅は、「可尋」としながらも二本のうち初めのものに智證大師将来の可能性を想定しているのであるから、わが国の偽作とすることは疑問であり、中国で如意輪観音が玉女に変身する考えが生まれていても不思議ではない。

加えて、先に指摘した胎蔵曼荼羅蓮華部院の観音の女性尊としての性格は、不空以後にこの傾向が強まってきていることを思わせる象徴的な例がある。それは、宝思惟の訳とされるが偽経とみなされている『観世音菩薩如意摩尼輪陀羅尼念誦法』の「観世音菩薩毘倶胝地結法」の一文である[25]。ここには如意輪観音の他経典にはみられない「若し女人懐中にて、但読誦すれば必ず大験を成す。念誦の時まさに聖如意輪菩薩の形相を憶ひ永く依怙となすべし」という文があり、毘倶胝という尊名の入る章の中に、女人が懐中にて読誦し、あるいは如意輪菩薩の姿を思って念誦することの功徳を説いている。如意輪観音が女性尊である毘倶胝と関係することが示されること、女人の用いる読誦法であること、そして女人が念誦時に憶う如意輪観音形相と、独自の如意輪観音と女性との関わりが示されているのである。このような傾向は、如意輪観音が玉女に変身する考えが生み出される環境の一つと判断できよう。

またより観音と女身との直接的な関係を示すのは、不空の弟子である含光の毘那夜迦法の秘儀を略記した『毘那夜

迦那鉢底瑜伽悉地品秘要』にみられる。ここには「菩薩此の身を其の婦と為りて現じ、しかして勧進し、毘那夜迦をして障礙をなさざらしむ。往昔の因縁あること、餘部説の如し」と述べられている[26]。ここでいう菩薩は十一面観音のことであるが、観音が女身となって毘那夜迦に身を任せることで、毘那夜迦を善神に導いたというのである。如意輪観音と同様に、十一面観音も女性となって救済するという共通性が知られるのである[27]。

このように、観音が女身に変身するという思考は中国で醸成を進めたものと思われ、如意輪観音と玉女を結びつける思考は、不空以後に生まれていた可能性が高いと考えられる。

ここで、中国でこのように新たに展開した如意輪観音信仰が、あまり時をおかずに嘉智子の周辺に届く環境があったことを確認しておきたい。前稿では如意輪観音と玉女の関係が直接みられる『都表如意摩尼転輪聖王次第念誦秘密最要略法』の請来が、史料上では宗叡の貞観七年（865）帰朝後で、観心寺像造像以後となってしまうことから、円猷・円修などの請来を考えた[28]。しかし、厳密に宗叡の帰朝やこの経典の請来を待たなければ、上記のような女性と密接に結びついた如意輪観音信仰が伝来しなかった訳ではなかろう。この時代には、承和の遣唐使の帰朝（承和六年八月二十七日条）の成果も想定すべきであろうし、前稿でも述べたが、宗叡・円猷・円修以外の九世紀の入唐僧たちも如意輪観音に関心をもっていたことは、空海をはじめとして何人もの僧に見出せるので、彼らの見聞が伝わった可能性もある[29]。例えば、先述の『如意輪王摩尼跋陀別行法印一巻』をもたらした円仁は、開成四年（839）二月五日に全雅から如意輪壇を受けている。円仁の『在唐送進録』にみえる「観音壇様一張」は、田中本『諸観音図像』中の如意輪曼荼羅で、全雅伝授のものを伝えているのではないかと考えられている[30]。また円珍も、大正蔵にみえない『如意輪勧請法』を録外として請来し、「上智慧輪三蔵書」には恵運請来の『如意輪蔵要略一巻』を智慧輪三蔵に請うていることが知れる。

このような入唐僧たちの多様な如意輪観音への関心もさることながら、何といっても嘉智子が唐に派遣した恵萼が承和九年（842）に帰朝していることを考慮すべきである[31]。恵萼と嘉智子の関わりは、彼の従僧として嘉智子の母方氏族（田口）出身の円覚がいたことも注意されよう。そして恵萼は、円仁・恵運とも交わり、五台山で得た観音像を普陀洛山寺に祀ったという観音信仰の持ち主であるから、唐における如意輪観音信仰を見聞していたとみてよいと思われる。また近年の外交史の研究によると、恵萼をはじめとして入唐には海商の船を利用していることも知られており、海商たちの活躍から中国情報が入手しやすい状況にあったことも留意できる[32]。

この章をまとめれば、平安初期には天皇・皇后を転輪聖王や玉女とみなす考え方が認められ、そこに不空以後の密教の中で顕になった如意輪観音に転輪聖王や玉女を読み込もうとする考えが伝わっていたであろうということになる。嘉智子を中心に述べ直すと、崩伝の夢や前世譚には理想の皇后としての玉女への意識が確認でき、そこに玉女は如意輪観音が変身したものとする考えが結びつき、観心寺像を造像させたことになる。

## 三　制作期と御願

これまで述べてきたことの上で、観心寺像が嘉智子の御願堂の本尊であることに焦点を当て、制作期の問題を考慮しながら、嘉智子の御願に迫りたい。まず制作期に関する先学の研究をみておこう。

観心寺像の造像年代およびその制作目的については、『日本彫刻史基礎史料集成　平安時代　重要作品篇三』の西川新次氏の考えが基盤となっている[33]。西川氏は、観心寺像の制作期は、嵯峨院太皇太后（橘嘉智子）の崩御する嘉祥三年（850）以前で、嵯峨太上天皇崩御を契機と考えて承和九年（842）前後を想定された。さらに、嵯峨院の不予

はすでに承和六年（八月一日、四日）にあり、承和七年（840）七月二十七日に観心寺三綱が鐘一口を鋳ることを檀越知識に請うていることから、本像の造立はこの頃に遡る可能性のあることを示唆される[34]。また本像と様式・作風において最も近い神護寺五大虚空蔵菩薩像の製作年代は承和七年五月から同十二年（845）と考えられ、観心寺像の造像年代と適応するとされた。

西川説を受けて田中恵氏は、その工房は官と繋がりを持つとされ、新たな観点として、講堂（御願堂）は真紹が都で活躍したことに起因すると考えられた。また神護寺像との様式的前後関係では、西川氏が先行すると考えたのに対して遅れると判断され、造像の契機を仁明天皇が崩御にいたる病を発せられた嘉祥三年に求め、完成は観心寺にあった工房を考慮に入れて斉衡年間（854～856）とされた[35]。

紺野敏文氏も西川説に立って、『東宝記』四に実慧が嵯峨太皇太后に承和八年に灌頂を授けたとする記事をのせ、またその灌頂文の存在することから、これにともなって講堂造営が始まり、承和九年に嵯峨太上天皇は崩御されるので完成は急がれたであろうから承和十年には完成していたと考えた[36]。

伊東史朗氏は、『観心寺縁起資財帳』に真紹が「厚く承和の聖主の恩を蒙り」と述べているところから、観心寺は仁明天皇と関係が深いとし、嘉祥三年に天皇崩御にいたる過程で嵯峨院太皇太后が発願造像され、御願堂たる講堂は嘉祥三年頃に造営され仏眼仏母・弥勒・如意輪の三尊はこの頃に開眼供養されたとした[37]。

丸山士郎氏は、寺地の施入があった承和三年（836）説を主張する。理由は、仏像が製作される際に用いられる図像がどの様に消化されているかという観点から、承和六年に開眼供養される東寺講堂諸像では四菩薩像・不動明王像・梵天像が観心寺像より先行し、四明王像と四天王像は観心寺像以降に造像されたとする様式的考察が前提となっている[38]。

以上、制作年代に対する見解をまとめれば、様式史的には神護寺像との前後関係を問題としながら、承和九年の嵯峨太上天皇崩御を契機とするか、あるいは嘉祥三年の仁明天皇崩御を契機とするかについて意見が分かれ、これに東寺講堂諸像との様式史的関係の考察を基に真紹が寺地を要請した承和三年を想定する丸山説がある。ただ承和三年説は、この年は寺地の要求であり、真紹の直接的な天皇との関与はまだなく、作風比較も異尊種の四明王・四天王像よりも、神護寺像との明瞭な親密性を重視すべきであるから除くことにする。

拙稿も基本的に西川説に基づきながら、後述するように西川氏・紺野氏の嵯峨太上天皇崩御に関わっての造像とする立場はとらず、田中氏および伊東氏の仁明天皇と真紹の関係を重視する見解に立つ。しかし、田中氏が完成を斉衡年間とする説はやはり神護寺像との密接な作風からは納得しがたい。伊東氏が仁明天皇崩御の嘉祥三年頃に開眼供養されたとするのは、作風的な可能性の範囲に含まれるとも思われるが、後述のように採らない。また仏眼仏母と弥勒まで同時期の作とされるのは無理があろう[39]。

要するに先学の説に対しては、造像の契機と考えられた嵯峨太上天皇と仁明天皇の二つの崩御あるいはその過程とは関係なく造像されたと考えたい。理由は既述のように、神護寺像との同様な作風を素直に考慮することと、もう一つはやはりこの如意輪観音像の女性性にある。確かに、如意輪観音は病気平癒の功徳もあろうが、先述の中国での如意輪観音信仰の考察を踏まえ、このような女性的な観音像が死を直前にした延命や病気平癒、あるいは追善を願って造られたとは思われないのである。

さて嘉智子の造像の願いは何であったかを探るために、これまでの研究以上に重視したいのは、度々触れた神護寺像と観心寺像の共通性である。言うまでもなく、同時代でこれほど似た作風の像は他に見出せないことから、同一作者あるいは工房の作と考えられる他に、仁明天皇とその母嘉智子が関わり、さらに真済と真紹という真言僧が関与し

ているという極めて近い条件で造像されたことが知られている(40)。

ここでさらに考慮したいのは、五大虚空蔵と如意輪観音という尊格の関係である。まず、共に九世紀初めにわが国に伝えられた最新の密教尊であることが注目できる。神護寺像は、奈良時代から知られていた虚空蔵菩薩を密教的に五尊に展開した尊格であり、その最初の彫像と考えられる。観心寺像も、奈良時代から知られていた二臂の如意輪観音(41)を密教的な六臂に表した最初の彫像である。言わば奈良時代から知られていた両菩薩のニューモデルであったわけである。

次に、奈良時代から平安時代初期に至るこの二尊格の関係が、以下の作例に一対のものとして見出されることは注目されてよい。東大寺大仏の両脇侍としての虚空蔵・（如意輪）観音像、興福寺東金堂の後堂東面の釈迦三尊、嵯峨上皇が故伊予親王とその母藤原吉子のために刻ませた白檀の釈迦三尊がそれである。観音は必ずしも如意輪観音ではないが、観音・虚空蔵が一対の尊格として捉えられていたのである。また胎蔵曼荼羅の釈迦院の三尊も観音・虚空蔵が脇侍であることが知られている(42)。

このような観音・虚空蔵を一対とする流れの中で、観音を如意輪観音に特定し、仁明朝における最新の姿を採用して造像されたのが観心寺・神護寺の両像であったのではなかろうか。ここには脇侍のような明瞭な一対性はないが、作風・願主・関係僧においても親近性が高く、後述するように共に仁明天皇の護持の目的を見出せることからも、五大虚空蔵・如意輪観音というセットの意識があったと考えたいのである。

この視点に基づき、観心寺像の造像時期を考える上で神護寺像の造像経過を参考としたい。幸いなことに、神護寺像の制作事情は、安置される宝塔院と関連してほぼ確定している。宝塔院は、仁明天皇御願で真済によって建立され（『神護寺承平実録帳』「一重桧皮葺毘盧遮那宝塔」）、五大虚空蔵が安置された（『三代実録』貞観二年二月二五日条の

真済伝）。『神護寺最略記』には、承和三年勅宣で同七年（840）五月事始め、同十二年（845）完成とみえる[43]。

勅宣とされる承和三年は、真済が遣唐使に任命された年であるから、実慧が受けた可能性が高い。承和七年、正月に真済は内供奉十禅師に補任され、十二月に実恵に代わって神護寺別当に任ぜられた[44]。よって、承和三年の仁明天皇の発願理由は分からないが、承和七年五月の事始めは、真済の正月の内供奉十禅師補任と十二月の神護寺別当就任が関係すると考えてよい。特に内供奉十禅師に補せられたことは、直接天皇の護持に関わることを任される立場に立つのであるから、仁明天皇のための宝塔院の造営や安置仏の造像を動かす契機としては重要な要素である。また、佐々木守俊氏[45]が述べるように真済の『五部肝心記』に五大虚空蔵菩薩像の印相は説かれているから[46]、真済の指導下で造像されたことは疑いない。

因みに承和七年に真済が開始したのは、翌年八年の干支が辛酉に当たることにも関係するのではなかろうか。つまり辛酉革命の危険の回避として造像が急がれたのではないかということである。後世のことながら、辛酉の歳を無事に過ごすために五大虚空蔵法が修されている例が知られているのであり[47]、このような五大虚空蔵菩薩の功徳を真済が知っていた可能性はあろう。また『続日本後紀』の承和八年は仁明朝で唯一、兵事が卜されている年であり、辛酉革命は意識されていたことが確かめられるのである[48]。

以上、神護寺像は真済が内供奉十禅師に任命されたことを契機に造り始められたということを述べたが、この点に鑑み真紹の内供奉十禅師の補任の事情を探っておこう。小山田和夫氏は実恵を通じて真済と真紹は親密な関係であり、真済が承和十年（843）十一月九日に権律師に補任されることにより内供十禅師を退き、そのあとの内供奉十禅師を真紹が引き継いだと指摘されている[49]。そして真紹は権律師に補任される承和十四年（847）四月二十三日までその任にあった。

また真紹は、承和十年十二月九日に官牒が東寺に下され、実恵から伝法灌頂職位を十二月十三日に東寺灌頂院にて授けられた。真済は同年に東寺二長者になっているから、真紹の伝法灌頂職位を授かったことと共に、実恵の後継者育成という位置づけが小山田氏によって指摘されている[50]。内供奉十禅師補任を契機として、真済・真紹に実恵からもそれぞれの何らかの働きかけがあったことを示している。

このように真紹は真済から内供奉十禅師を引き継ぎでいるのであり、神護寺像がこの職の補任によって始められたことから、観心寺像の造像契機も、承和十年と類推されてくる。この見解に立つと、同年十一月十四日に河内国国守を観心寺別当に定めるという太政官符が発せられていることも注目できる[51]。この十一月の朝廷の動きは、小山田氏が真紹の内供奉十禅師補任を十一月十九日から同二十七日までの間と絞っておられることと[52]、日時的にも符合し、無関係とは思われないのである。

そしてまた、嘉智子にとって承和十年は、前年七月に嵯峨太上上皇が亡くなり、これをきっかけに皇太子の恒貞親王らが謀反を企てた承和の変が起こるという世情不安な折であった[53]。この時期に嘉智子が、仁明天皇を護るための如意輪観音造像の発願があっても然るべきと考えられる。

以上の考察が正しければ、観心寺像の制作年代は、承和十年から嘉智子の崩御する嘉祥三年の間となるが、仁明天皇の護持という嘉智子の御願からすれば、承和十年の造像開始に伴い出来るだけ速やかに完成させられたものと推測出来よう。

## おわりに

一・二章では観心寺像の女性性から、玉女を通して嘉智子の望む皇后像と如意輪観音とが結びつき、観心寺像の女性性の中に理想の皇后としての玉女の姿を読みとることができると述べた。三章では、観心寺像の造像が承和十年を契機とするとした。ここで言及しておかなければならないのは、承和十年は嘉智子は既に皇后を退いていることである。しかし、嘉智子の崩伝に母子草の例えがみられ、同じ嘉祥三年に仁明天皇の後を追うように亡くなるように[54]、嘉智子は母后として病弱な仁明天皇を生涯にわたり一体となって支えたのである。またこの仁明天皇代には立后がなされなかったことからも[55]、観心寺像には皇后の役割を包括する母后としての理想の姿が反映していると考えられよう[56]。

**注**

(1) 拙稿「観心寺如意輪観音像と檀林皇后の夢」笠井昌昭編『文化史学の挑戦』思文閣出版　二〇〇五

(2) 拙稿「平安初期仏像にみる女性性」『週刊　新発見！日本の歴史一四　平安時代二　平安仏教と王権の変容』朝日新聞出版　二〇一三

(3) 観音の女性性に関しては、弥永信美「如意輪観音と女性性」『インド哲学仏教学研究』八　二〇〇一、同『観音変容譚』法蔵館　二〇〇二、岩崎和子「観音像に見られる女性像」『歴史評論』七〇八　二〇〇九、拙稿「向源寺蔵　木造十一面観音菩薩立像」『国華』一四〇七　二〇一三、なども参照願いたい。

(4) 片膝を立てる坐方が女性特のものであることに関しては、山折哲雄『坐の文化論』佼成出版社　一九八一、を参照。石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術　一九七五

(5) 大正蔵一八　七ａ「聖者多羅尊、青白色相雑、中年女人状、合掌持青蓮」。大正蔵三九　六三二ａ・ｂ「畫多羅菩薩、凡諸聖者皆面向大日、今言観音右辺、即是座西、他皆倣此、此是観自在三昧、故作女人像、多羅是眼義、青蓮華是浄無垢義、以如是普眼摂受群生、既不先時亦不後時、故作中年女人状、不太老太少也」

注(2)に加えて、観音の女性性に関しては、岩本裕『仏教説話研究第三巻　仏教説話の伝承と信仰』開明書院　一九七八、の第四章・第五章を参照されたい。岩本裕氏は、インドにまでさかのぼり観音はもとは女性神であったことを、仏教の諸尊（仏・菩薩・明王・天）の中で最も女性的な容姿を持っている事実、持物として女性の象徴である蕾形の蓮華を持っていることから述べられ、それが仏教に取り入れられて変成男子の教説から男性として処遇されたとされている。他の観音においても准胝観音や葉衣観音はもともとヒンドゥー教の女神であったことが指摘されている。

(6) 『弘法大師空海全集　第四巻』筑摩書房　一九八四、一六九～一七一頁に多羅菩薩が中年女人の姿をとることの意味を述べている。

(7) 大正図一　二四～二六

如意輪観音が女性尊であることは、例えば『幸心鈔』に清瀧御事として、その御正体は僧形は准胝に、女形は如意輪にあて、『渓嵐拾葉集』には「如女示現観世音者、六観音中何乎、答、女女示現観世音者如意輪也…応知以如意輪為六観音総体」としている。

(8) 田中公明『敦煌　密教と美術』法蔵館　二〇〇〇、第三章及び同著『両界曼荼羅の誕生』春秋社　二〇〇四

(9) 注(1)。以下の本文中の前稿はすべて注(1)をさす。

(10) 大正蔵一八　七二六ｃ。空海の『三学録』にも記載されている。

(11) 倉本尚徳「北朝造像銘における転輪王関係の用語の出現」『印仏研』六〇巻一号　二〇一一

(12) 苫米地誠一「真言密教における護国」『平安期真言密教の研究　第一部初期真言密教教学の形成』ノンブル社　二〇〇八

(13) 『弘法大師空海全集　第六巻』筑摩書房　一九八四所収、『性霊集』第六「右将軍良納言為開府儀同三司左僕射設大祥斎願文」、第九「大僧都空海嬰疾上表辞職状」、第九「高野建立初結界時敬白文」、第四「献梵字幷雑文表」など

(14) 『弘法大師空海全集　第一巻』筑摩書房　一九八三所収、『秘密曼荼羅十住心論』巻二

(15) 『弘法大師空海全集　第一巻』筑摩書房　一九八三所収、『秘密曼荼羅十住心論』巻二、一八七～二一二頁

朝枝善照「日本霊異記にみられる聖君問答の意義」『平安初期仏教史研究』永田文昌堂　一九八〇

(16)『日本文徳天皇実録』嘉祥三年五月五日条
(17)大正蔵二〇　二一七b
(18)注(5)岩本前掲書、「第二章　七観音」
(19)朴亨國「如意輪観音像の成立と展開—インド・東南アジア・中国—」『仏教芸術』二六二　二〇〇二
(20)大正図四　八六六b
本尊変王玉女事
　又云発邪見心、婬欲熾盛可堕落於世、如意輪我成王玉女、為其人親妻妾共生愛、一期生間、荘厳以福貴、令造無辺善事、西方極楽浄土令成仏道、莫生疑云々
(21)弥永信美「如意輪観音と女性性」『インド哲学仏教学研究』八　二〇〇一。弥永氏が日本語的な用語の使用が認められるとされている点については、部分的に和訳を施されたと言えるかもしれない。『覚禅鈔』如意輪上（大正図四、八五五b）では、後者の軌に「持本」の割書が入る。文中引用は、如意輪下のもの（大正図四、八六四c）。
(22)長部和雄「漢訳如意輪法軌に関する研究」『印度学仏教学研究』二九　一九六六
(23)『覚禅鈔』には、「観自在菩薩如意摩尼転輪聖王金輪呪王経一巻〈法務御抄云、無諸家録、但諸師引用之〉」（大正図四　八五五b）とあり、四臂・八臂・十臂・十二臂などの図像を説いていることが判明するが、全容他は不明である。
(24)『覚禅鈔』には、「如意輪王摩尼跋陀別行法印一巻〈慈、秘録無之〉」とある。円仁の『入唐新求聖教目録』には、長安において不空訳の如意輪観音経軌に加えて、訳者不明の「如意輪王摩尼跋陀別行法印一巻」という他には見えない経を得ているがこれに比定できよう。また『敦煌法藏』に収録される中国撰述と考えられるもののうち、「観世音菩薩如意輪陀羅尼：別行法」、「観世音菩薩如意輪陀羅尼章句咒」、「如意輪王摩尼別行法印」などがみられ、同一の経軌が含まれる可能性が高いとともに、長部氏の指摘の不空以降では、大正蔵に収録される如意輪観音経軌から展開した新たな如意輪観音信仰の高まりがあったことが窺われる。
(25)大正蔵二〇　二〇三a「若於女人懐中、但読誦必成大験、念誦之時當憶聖如意輪菩薩形相永作依怙」
(26)含光記『毘那夜迦那鉢底瑜伽悉地品秘要』（大正蔵二一　三二一c）の「毘那夜迦生歓喜心双身真言」を字義的に解釈する中で述べられる。壁瀬灌雄「毘那夜迦伽那鉢考」『龍谷大学論集』三四六　一九五三、彌永信美「v象頭神の歓喜」『観音変容譚—仏教神話学Ⅱ—』法蔵館　二〇〇二、などを参照されたい。

(27) 拙稿「向源寺蔵　木造十一面観音菩薩立像」『国華』一四〇七　二〇一三

(28) 注(1)拙稿

(29) 空海『請来目録』には、「如意輪念誦法」「観自在菩薩如意輪瑜伽」の他に、貞元目録に載らないものとして「如意輪観門義注秘訣」がみえる。

(30) 注(24)参照。

『入唐求法巡礼行記』開成四年（839）二月五日条。小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』鈴木学術財団　一九六九、の開成四年（839）二月五日条の注釈、石田尚豊「円仁の揚州求法について」『青山史学』八　一九八四。

(31) 恵蕚については、橋本進吉「恵蕚和尚年譜」『伝記・典籍研究』岩波書店　一九七二、高木訷元「唐僧義空の来朝をめぐる諸問題」『空海思想の書誌的研究　高木訷元著作集四』法藏館　一九九〇、及び注(32)の研究を参考とした。彼は三度の入唐を果たしている。①八四〇年入唐—八四二年帰朝、②八四三年頃入唐—八四七年帰朝、③八四八年頃入唐—八四九年帰朝

(32) この時期の活発な日中間の往来に関しては、佐伯有清『最後の遣唐使』講談社　一九七八、榎本渉『選書日本中世史4　僧侶と海商たちの東シナ海』講談社　二〇一〇、田中史生『国際交易と古代日本』吉川弘文館　二〇一二など参照。

(33) 『日本彫刻史基礎史料集成　平安時代　重要作品篇三』中央公論美術出版　一九七七

(34) 承和七年に鐘を鋳造することは観心寺の完成を意味すると考えられているので、この年までに御願堂も完成していた可能性を想定される。しかし、嘉智子の勅願堂を観心寺の完成と一体のものと考える必要はないだろう。

(35) 田中恵「観心寺草創期の造仏と真紹」『岩手大学教育学部研究年報』第四一巻二号　一九八二

(36) 紺野敏文「観心寺如意輪観音像の風景」『日本美術全集第五巻　密教寺院と仏像』講談社　一九九二

紺野氏が取り上げている『嵯峨太上大后潅頂文』（『弘法大師諸弟子全集』巻上）は、「観音菩薩也応陶御身授秘密仏戒於七宝之珠臺」なる表現が入り、嘉智子と観音の関係を考える上では、極めて魅力的な史料である。そして、西本昌弘氏（「嵯峨天皇の潅頂と空海」『関西大学　文學論集』五六巻三号　二〇〇七）が実恵の著作として認められている。しかし、『平城天皇潅頂文』と一致する箇所があることなど、その成立をめぐっては慎重に扱いたい。

(37) 伊東史朗「真言密教彫像論」『新編名宝日本の美術　神護寺と室生寺』小学館　一九九二

(38) 丸山士郎「東寺講堂諸像と承和前期の作風」『MUSEUM』五三二　一九九五

(39) この二尊像は、久野健「観心寺の平安初期仏像について」『國華』九六一　一九七三、により尊名比定がおこなわれた。こ

こで述べられている根拠の他に、仏眼仏母像に関しては、宗叡請来とされる「理趣経十八会曼荼羅」（大正図五　七九五）で同じ図像がみえることによってさらに明らかとなろう。そして、宗叡は貞観七年（865）に帰朝し、貞観十年（869）に真紹から本寺を受け継いでいるから、この頃の造像と考えるのが妥当であろう。

(40) 観心寺像は注(33)、神護寺像は『日本彫刻史基礎史料集成　平安時代　重要作品篇二』中央公論美術出版　一九七六、を参照。

(41) 『性霊集』には、空海が五大虚空蔵の画像を作制したことがみえる（日本古典文学大系七一　三一一）。奈良時代の（如意輪）観音は、観音が説く如意輪陀羅尼の信仰であり、未だ明確に如意輪観音としては意識されていなかったと思われる。これは、二臂像を説く菩提流志訳（No.一〇八〇）、義浄訳（No.一〇八一）、実叉難陀訳（No.一〇八二）、宝思惟訳（No.一〇八三）などにみられる特徴である。拙稿「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像—石山寺像を中心に—」『美術研究』三五三　一九九二、を参照されたい。

(42) 『小野玄妙仏教芸術著作集』第三巻・八篇二章、開明書院　一九七七、初出は『佛教之美術及歴史』仏書研究会　一九一六。田村寛康「奈良時代東大寺盧遮那仏の両脇侍像について」『仏教芸術』一二〇　一九七八

(43) 注(40)参照

(44) 小山田和夫「真済について—実恵・真紹との関係」『立正史学』四二　一九七八

(45) 佐々木守俊「神護寺五大虚空蔵菩薩坐像の図像につて」『美術史』一四七　一九九九

(46) 大正蔵七八　三八

(47) 『覚禅鈔』五大虚空蔵法（大正図5　四五b・四八b—c）は、治安元年（1021）に小野僧正仁海が除災のために初めて金門鳥敏法（＝五大虚空蔵法、かのととりのほう）を修したとする。尚、高雄山神護寺ホームページ、寺宝紹介に「金門鳥敏法」が触れられている。

(48) 『続日本後紀』承和八年五月三日条、同年六月二十二日条の二例のみ。共に、肥後国阿蘇郡の神霊池の水が減ったことを占うと、旱疫と兵乱があると出たとある。

(49) 真紹に関しては、注(44)小山田前掲論文、および同氏「禅林寺創建と真紹」『古代文化』二八三　一九八二、参照。小山田氏は、この親密な関係から、真紹は神護寺の梵鐘（貞観一七年銘）の発願者であるとされた。

(50) 注(49)に同じ。

(51) 佐藤全敏氏は日本史研究会古代史部会報告（二〇一三年九月二十二日）において、「観心寺如意輪観音像　再考」という発表をされた。小生はこの発表を直接お聞きしていないが、発表の際に配布された資料によると、観心寺像の造像は承和十年を契機として行われたものであると述べられている。それはこの年に、小規模な私寺に俗別当として河内国国守を当てられたのは、嘉智子の御願堂が造営されたからであると説明され、このことは真紹が内供奉十禅師に任じられたことを契機としたものと考えるほかないとされている。俗別当という拙稿とは別の視点から精緻にアプローチされた興味深い御発表で、結論的には拙稿と同じとなっている。成稿を待ちたい。

(52) 『観心寺勘録縁起資材帳』（元慶七年〈883〉）所引、承和十年十一月十四日付太政官符。

(53) 注(49)に同じ。

(54) 遠藤慶太「『続日本後紀』と承和の変」『古代文化』四九四　二〇〇〇、によると、承和の変のあと、嘉智子と藤原良房は嵯峨上皇の遺詔を二度にわたって否定したことが指摘される。特に承和十一年八月五日の先霊（嵯峨）の祟りの処理が議論の対象になっていることに、承和の変後いまだ安定期に入っていないことが窺える。

(55) 仁明天皇が病弱であったことは、『続日本後紀』の崩伝や、度々みえる不予の記事で明らかである。仁明天皇の母后に対する態度は、嘉智子への朝勤に表れていることが指摘されている（遠藤前掲論文　注(53)）。

(56) 嘉智子崩伝では、民間において母子草（春の七草の一つのごぎょう）で餻（こなもち）を作ることをやめたという流言があったことをのせ、母子の親密な関係を象徴させている。嘉祥三年二月十九日には、天皇のことを心配するあまり、何度も悶絶したとあり、崩御の二日後の三月二十三日には、病を得て出家し自身も五月四日に亡くなるのである。

嘉智子の母后としての歴史的位置づけに関しては、保立道久『平安王朝』岩波新書四六九　一九九六、西野悠紀子「母后と皇后―九世紀を中心に―」前近代女性史研究会編『家・社会・女性―古代から中世へ―』吉川弘文館　一九九七、などの研究から、その役割が歴史的画期をなすものであったことが指摘されている。

観心寺像の年齢を想定してみると若くもなく老いもせず、そのふくよかさからはある程度年齢を重ねた女性が思われ、それは母后としての理想のイメージに相応しく思える。そしてこの年齢設定は、第一章で述べた多羅菩薩が『大日経』などで中年女人の状であるとされていることもイメージソースにあるのではないだろうか。因みに、嘉智子は承和十年は五八歳である。

尚、守覚親王（1150～1202）の『御記』（大正蔵七八　六一六ａ）によれば、仁明天皇から二代後の清和天皇代に真然僧

正により毎日如意輪御供養法がおこなわれ、次の陽成院の時にも智泉大徳による長日如意輪供養法がおこなわれたという。

清和天皇毎日如意輪御供養法御指合之時。以眞然僧正被仰付之。毎月如意輪一體御宸作同御供養云云　陽成院同如意輪供養法長日有御勤。御差合之時。智泉大徳奉之云云

この記事から平安初期、真言宗においては特に天皇に関して如意輪法がおこなわれていた状況が想定できるが、その初例として嘉智子の如意輪観音造像があったと位置づけられるのではなかろうか。